

主体的・協働的に活動し、学びを深める生徒の育成

大館市立南中学校 教諭 畠山 七緒子

大館市立南中学校では、研究主題を「主体的・協働的に活動し、学びを深める生徒の育成」とし、研究の重点として次の3つの共通実践事項を設けている。

- ① 学習プロット・・・授業の見通しをもたせるとともに、学びの深まりの跡が見える工夫
- ② 直耕^{じっこう}タイム・・・仲間と関わり合うことで学びを深め、変容や高まりを目指す時間
- ③ 振り返りの時間の充実・・・学びの価値付け・次時への意欲

本稿では、生徒の思考を広げたり深めたりするための手立てを、実践例を交えて紹介する。

1. 日頃の実践で心がけていること

- (1) ゴールに到達した生徒の姿をイメージして指導計画を作成すること

単元で、本時で身に付けさせたい力やゴールに到達した生徒の姿を具体的にイメージすることを大切にしている。それによって、以下に挙げる3点を意識することにつながる。

- ・ゴールに到達するために、どのような活動をすればよいのか？
- ・全員が表現できる、表現したくなる課題設定とは何か？
- ・スパイラルな指導で身に付けさせたい力と、そのための活動（帯活動）とは何だろうか？

- (2) 単元を通して、また本時においても、生徒が変容を実感できるようにすること

他の生徒と関わり合う中で、気付きがあったり、考えが深まったりするような手立てを工夫するようにしている。学年が上がると、難しさを感じる場面が増える傾向があるが、英語で表現することの楽しさや分かり合えるうれしさが実感できるような単元構成となるように工夫する。

- (3) コミュニケーションとしての英語であることを生徒に意識させること

聞き手や読み手など、常に相手意識を大切にするよう指導している。どう話したら聞き手に伝わりやすいか、どう書いたら読み手に理解してもらえるか考える場面を意図的に設けている。その際に、教師から言語材料や話型を与え過ぎることがないように留意し、既習内容を生かした表現を生徒から引き出すような声かけやフィードバックをするよう心がけている。

2. 指導事例

上記の内容を取り入れた本時指導案を一つ提示する。

単元はNew Horizon English Course 1 Stage Activity 1 “All about Me” Posterである。本校の生徒は、小学校からずっと単級で過ごしてきた仲間であるため、単純な自己紹介ポスターでは、書くことや読むことの目的が曖昧になってしまう。お互いの紹介を読みたくなる場面、状況の設定を工夫する必要がある。そこで、最終的に書いたポスターを用いて、Who am I?クイズをすることにした。クイズを通してお互いの新たな一面を知ろう、というゴールを生徒と共有することで、「書く」「読む」「話す」それぞれの活動に目的意識をもてるようにした。

(1) 指導案

本時の計画（本時3／3）

- (1) ねらい 互いのことをもっとよく知るために作成したクイズを主体的に読み、誰が書いたと思うか発言したり、質疑応答、感想交流等をしたりすることができる。

【思考・判断・表現】

(2) 学習過程

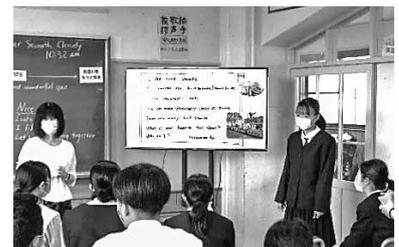
段階	学習活動	時間	教師の支援と評価	学習資料
導入	1 Warm-up	5	・ペアでヒントを出しながら進められるよう励ます。	疑問詞カード
	2 Introduction（一斉） （1）めあてを確認する。	7	・ALTやJTEとの対話を通して、本時のめあてと活動内容を確認する。	モニター
	「私は誰でしょう」クイズに答えたり、質問や感想を言ったりして、お互いのことをもっとよく知ろう。			
	（2）直耕タイムの形式やメモ用紙の使い方を確認する。		・グループ編制をする。 ・友達のクイズの中から参考になる文をメモするよう確認する。	メモ用紙
展開	3 Quiz Time（直耕タイム） （1）2グループに分かれて活動する。（グループ）	27	・一人一人が発話する機会をもてるように、挙手発表と意図的な指名のバランスを見ながら進行する。 ・解答が分かった時点で、出題した生徒が質疑応答や感想交流を進められるよう支援する。 ・全体でのクイズタイムに出題するためのクイズをグループで選出できるように、意見をまとめる。	モニター タイマー
	（2）それぞれのグループで選出されたクイズを全体で共有する。（一斉）	6	・どんな点がよいと感じるか、生徒から引き出す。	
	クイズを読み、出題者が誰なのかを発言したり、出題文に関する質疑応答や感想交流をしたりしている。（活動の観察）			
終末	4 Reflection 本時の学習を振り返る。（個）	5	・振り返りの視点を明確にする。 ・数名の生徒を意図的に指名し、学びを深めたり価値付けたりする。	振り返りカード



クイズを解くために読む



出題者が誰か考えを話す



出題者と質疑応答や感想交流する

(2) 学びを深めるための手立て

(a) マッピングを用いた思考整理

マッピングを思考ツールとして用いることでキーワードを整理してから書かせた。伝えるべきキーワードは何か、つながりのある文にするにはどんな順番で書いたらよいか等をメモさせた。また、話の展開に応じてどんな接続詞があれば分かりやすいかも考えるよう助言した。

I like eating. I like eating sushi. It is delicious. My favorite sushi is tuna. Do you like sushi? What is your favorite sushi? Who am I?
--

生徒のクイズ例

(b) 既習内容を用いた自己表現

日頃から、「伝えたいことを英語でどう表現したらよいか分からない」という場面では、発想を転換する手立てを用いている。例えば、「11時間寝る時もある」と表現したい生徒は「8時に寝て、7時に起きる」と転換することで、既習内容を用いて自分の力で書くことができた。また一方で、辞書を用いて新出語句を学ぶことも大切であると感じている。例えば、本時で「フライドポテト」について紹介したい生徒がいた時に、french friesという表現を新たに覚え書いていた。こういった語句に関して、クイズをモニターで提示する時に、生徒の理解を助けるために、クイズの文面にイラストや画像をプラスした。教科書には出てこないが、生徒の発信語彙として使用頻度が多い語句は、こうした足場かけを教師が意識して行い、定着を図っていききたい。

(c) ALTとJTEのティーム・ティーチングを生かした指導

今回の授業では、直耕タイムでALTとJTEが二つの教室に分かれて活動した。少人数にすることで、一人一人の発言の機会が増えるとともに、よりよい作品を選ぶ視点を共有しやすくなった。それぞれの教室では、生徒からの質問やコメントを黒板にいくつか板書したことで、生徒は、互いの発言からよいと思うものを活用し、積極的に発言していた。ティーム・ティーチングの打合せの時間は多く取れないこともあるが、本時で身に付けさせたい力や、ゴールに到達した生徒の姿を具体的にイメージすることで、ALTと協働しながら指導・評価していくことができると感じている。

3. 成果と課題

一人では難しさを感じる活動であっても、みんなで取り組む雰囲気の後押しされ、生徒が粘り強く取り組む姿を多く見ることができている。既習表現をスパイラルに想起させることで、英語をコミュニケーションのツールとして活用しようとする姿も見受けられる。

一方で、学習した内容を確かな学力として身に付けさせること、個人差が大きく影響する場面であっても全員が取り組める課題を設定すること、一人一人が自分の考えを発表する力を伸ばすことなどが今後の課題である。実践を積み重ねて、これらの課題をクリアできる生徒を育成していきたい。